

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2022年 7月のはじめごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！ 暑いですね。園庭の泰山木に珍しく花が咲きました。ゆりの花がいくつも咲きました。近くを通ると、ゆりの花の香りがふわーんとしてきます。けやきの葉もかなりふさふさになってきました。（このページ下の写真は、けやきを見上げて撮りました）

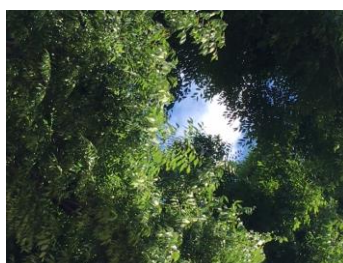
もうすぐ、夏休みですね。7月の中ごろから、公園の木ではセミたちの羽化が始まります。夜散歩で観察してみてください。土から出てきたセミの幼虫たちも、あまりの暑さにびっくりするかもしれませんね。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

須藤麻江 近藤千春（本の部屋の先生）

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

- ① たんぽぽ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんに
- ・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刻される可能性もあります。
 - ・紹介した絵本は重版未定も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。



① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。

「こぶたはなこさんの
みずあそび」

「こいぬがうまれるよ」

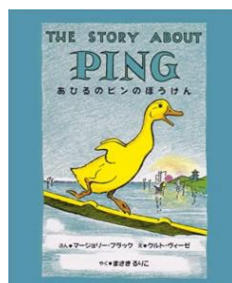


「かまきりのちよん」



「かばさん」

② 年中組・年長組のみなさんに。

「やねうらべやの
おばけ」「ソフィーとちいさな
おともだち」「あひるのピンの
ぼうけん」「せみとり
めいじん」

③ 大人のみなさんに。



「最初の質問」

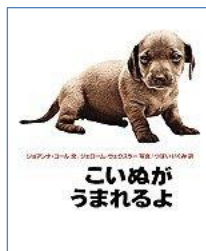


「ぼくからみると」



「すてきなあまやどり」

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



● 『こぶたはなこさんのみずあそび』

くどうなおこ・作 いけずみひろこ・絵 童話屋 1045円/1985年
※重版未定

こぶたはなこさんのなんてチャーミングなこと。みずあそびに出かけるまでの支度から始まって、プールで遊んで、お昼寝をして……。でも、なぜかはなこさんはどろだらけ。なにをしていたのかな？こぶたはなこさんは、いつでもどこでも楽しく過ごせちゃうんです。いいな。「こぶたはなこさん」シリーズは、「たんじょうび」「おべんとう」「うんどうかい」など、他にもあるので、ぜひ読んでみてくださいね。（須藤）

● 『こいぬがうまれるよ』

ジョアンナ・コール・作 坪井郁美・訳 写真・ジェローム・ウェクスラー
福音館書店 990円/1982年

最初に登場する生まれたばかりの赤ちゃんを見ると、21年前に私の手のひらの上でもぞもぞ動いていた柴犬の赤ちゃんのことを思い出します。耳も聞こえない、目もあいていない子犬。手のひらから感じたのは命の重さとあたたかさでした。この絵本は小さな小さな子犬が、少しずつ大きくなって、女の子の犬になるまでを丁寧に写真で見せてくれます。子犬が可愛くて、愛おしくなります。我が家の柴犬は、2年前に19歳で天国に行きました。（須藤）

● 『かまきりのちよん』

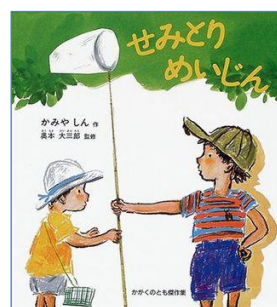
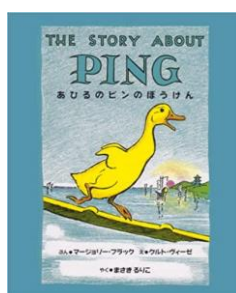
得田之久 作・絵（福音館書店）2022年（復刊中。1967年初版）/990円
虫のカマキリ、好きですか？どちらかといえば苦手なわたしですが、この絵本のおかげか親近感が増し増しに…！「かまきりのちよん」の1日（生態）がわかりやすく描かれていて、今もなお子どもたちをひきつけるのもうなずけます。大人としてあらためて読んでみると、〈知ることは理解への入り口〉であることを思い出しました。身近な自然への興味はもちろん、これからの時代ますます大切だといわれる〈エンパシー＝他者を理解しようとする想像力〉へもつながっていくような気がしてなりません。アリ・てんとう虫・クモ・トノサマバッタ…名わき役として登場する夏の虫と夏の花もシンプルに美しい。昆虫絵本の第一人者・得田氏のデビュー作です。（近藤）

● 『かばさん』

やべ みつなり 作 (こぐま社) 2001年/1320円

「あるひ、みつこと おとうさんは、でんしゃにのって、かばを みにいきました。」の最初の一文にハッとします。「動物をたくさん見にいきました」でもなく、「動物園に行きました」でもないのです。すごくいいなあ。「かば」だけを見に来たみつことお父さんの、楽しくて心あたたまるおはなし。かばの親子になりきって遊ぶみつことおとうさん(みつことゆったりひびきあう、物言わぬおとうさんがまた素敵)。みつこが「かば」をこよなく愛していること・そんなみつこをおとうさんが大切に育てていること…が、じんわりと伝わってきて、心の底から嬉しくなります。かばさんもお父さんもカッコイイ！(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『やねうらべやのおばけ』

しおたにまみこ・作 (偕成社) 1320円/2020年

夏になるとこわーいおばけ話が人気ですが、この絵本にはとても可愛らしいおばけが出てきます。おばけは屋根裏部屋にすんで気ままに暮らしていましたが、ある日、女の子が突然入ってきたのだから、びっくり。入って来ないようにとこわがらせるのですが、なぜかその子は全然こわがらない。とうとう、おばけは女の子の部屋に乗りこんでいきます。さあおばけと女の子は、どうなるのでしょうか。私なら、こんなかわいいおばけ、ポケットに入れておきたいです。(須藤)

● 『ソフィーとちいさなおともだち』

パット・ジトロウ・ミラー・文 アン・ウィルズドルフ・絵 二宮由紀子・訳 (光村教育図書) 1540円/2018年

ソフィーのママは夕食に食べるためにファーマーズ・マーケットでかぼちゃを買いました。ところが、そのかぼちゃはソフィーが抱っこするのにぴったりのサイズ。ソフィーは、かぼちゃにマーカーで顔をかき、バーニスという名前をつけて、寝る時も、遊ぶ時も、図書館のお話会に行く時も、いつも一緒に過ごします。ところが、バーニスはだんだん柔らかくなっていきます。そうですよね。自然の流れです。ソフィーはバーニスのためにいいことを思いつきます。さあ、なんでしょう。(須藤)

●『あひるのピンのぼうけん』

マージョリー・フラック 作 クルト・ヴィーゼ 絵 まさき りりこ 訳 (瑞雲舎) 1994年/1388円(重版未定)

あひるのピンは、中国の揚子江に浮かぶ船「かしい目」に住む「とてもうつくしいこどものあひる」。親や姉兄・親族一同大家族と共に、船のご主人に飼われています。ある日、遊びに夢中になったピンは船に帰ることができなくなり、ひとりぼっちで一晩過ごすことに。さて、ピンは無事に帰ることができるのでしょうか…！？どんなに古くても、パッと見が地味でも、子どもたちを強く引きつけて離さない良質な物語絵本の一冊だと思います。主人公に同化・共感して物語世界を深く楽しむ子どもの姿と、時代というふるいにかけてもなお、子どもと大人を満足させ続けている絵本に感動します。(近藤)

●『せみとりめいじん』

かみや しん 作 奥本大三郎 監修 (かがくのとも傑作集) 1997年/990円

昆虫愛あふれる某俳優さんのおかげでしょうか…虫とり網を持つ子どもや親子を見かけることが増えたような気がします。というわけで、この絵本。身近な材料を使ったこだわりの手作り網で、上手にせみをとる名人ごんちゃん。教え上手でもあるごんちゃんにあこがれる年下のでっちゃんは、失敗を重ねた末に、初めてせみを捕まえることができました。たかが虫とり？されど虫とり！“命を感じる”ことそのものだと思います。たとえばアブラゼミの、あの大きすぎる鳴き声(!)手に持って感じたことがありますか？子ども時代に、豊かな生の経験がたくさんあると素敵ですね。大人の虫とり名人おふたりの手によるワクワク絵本。久しぶりに網を持って出かけようかしら♪←かつての虫とり少女(近藤)

③ 大人のみなさんに。



●『最初の問題』

長田弘・詩 いせひでこ・絵 (講談社) 1500円/2013年

いくつも突きつけられる質問。「今日、あなたは空を見上げましたか。空は遠かったですか、近かったですか。」「雲はどんなかたちをしていましたか。風はどんな匂いがしましたか。」ゆっくりページを開くごとに、問われる様々なこと。ゆっくり答えを考えていくうちに、自分にいま必要なことが見えてくるような、そんな絵本です。いせひでこさんの絵が長田弘さんの言葉と呼応しあって、とても

やさしく心地よいです。(須藤)

●『ぼくからみると』

高木仁三郎 文 片山 健 絵 (のら書店) 2014年/1540円

夏休み。昼すぎのひょうたん池。魚を釣るよしくん…自転車を走らせてくるしょうちゃん…池の中の魚…水面に浮かぶカイツブリ…舞いおりのトンビ…池辺の巣にいるカヤネズミ…花に群がるミツバチ…アマガエル…木の上のモズ…そして、「だれかさん」。それぞれの目にうつる景色と視点に、その臨場感と迫力に、ただもう息をのむばかりの豪快かつ繊細な絵本です。片山健さん渾身の油絵は生命力がみなぎって野性的。ムンムンとした草いきれまでもが立ちのぼって、描かれているものすべてが飛び出してきそう。生きとし生けるものへの生命賛歌。読み返すたびに、深々とひたってしまいます。(近藤)

●『すてきなあまやどり』

バレリー・ゴルバチョフ 作・絵 なかがわちひろ 訳 (徳間書店)

2003年/1760円※重版未定

ブタくんが、友だちのヤギさんの待つ家に帰ってきました。きれいな花束とかごをさげて、びしょぬれで。「傘を持っていかなかったんだね、どうしてあまやどりをしなかったんだい？」とたずねるヤギさんに、ブタくんは「(濡れないように)あまやどりしたよ」と答えます。ではどうして、雨がやむまであまやどりしたはずのブタくんは、びしょぬれで帰ってきたのでしょうか…。その理由は読んでのお楽しみ♪(あまりにも衝撃的…いや、ほほえましくて、ニッコリしちゃうと思います) なんととっても二人の仲の良さがわかるサイドストーリー的な絵にもご注目。観音開きになっている楽しいページと併せ、作者の優しさと遊びゴコロが光ります。なんでも話したくなる大好きな友だちがいるってステキだなあ。(近藤)